

「子どももの健康相談」から見た 親達の子育ての悩み

白梅学園大学 子ども学科

教授 小林 美由紀

「子どももの健康相談」あるいは、「小児の健診」においては、小児の医学的相談や診断というよりは、「子育て相談」に近いことがかなりの部分を占めます。私も20数年前に、今は廃刊となった「わたしの赤ちゃん」の電話相談を毎月行っていた頃、良くそうした相談が舞い込んできました。相談の初めは、「体重が増えない」、「睡眠がうまくとれない」「発達が遅れているのでは」といった体に関する相談なのですが、実際は、離乳食がうまく進められない、食事の間隔や量がうまく一定にならない、睡眠と日常の活動時間をうまくとれない、自分の子どもが、他の子どもと

比較して、何か劣っているのではないかと不安だといった、子育ての悩みが隠れていることが、実に多かったのです。そこには、核家族化という名のもとに、日中ひとりで慣れない子育てに奮闘している多くは母親達の姿があぶり出されています。ここで、祖父母世代の助けを借りて、もっと楽になったらとも思ったのですが、実情はかならずしもそうではなく、少子化の貴重な子どもの一挙一動に親戚一同の目が集まって、ちょっとした気になることが子どもにもあると、母親の育て方に問題があるのではないかと逆にストレスを生み出したりします。子どもの健康相

談ではまず、自信を失いがちな母親の気持ちをほくすことから始めなければなりません。

この電話相談の中で、きわめつけはこんなものがありました。「子どもが私に暴力を振るって困っているんです」というもので、そのころはやり言葉となっていた「家庭内暴力」のはしりかと、思わず心を引き締めて聞くと、「子どもが私の言うことを全く聞いてくれないで、体をばたばたさせて、足で私のおなかを蹴ってくるんです。」と言うので、かなりこじらせて大変になっている様子です。「そうですか、それは大変ですね、ところでお子さんはいくつですか?」と尋ねると、「200です。」「2歳ですか、それなら:」「いえ、2か月です。」「えっ:」相談者が初め、冗談で言っているのかと思っただけでしたが、相手は真剣です。慣れない子育てに、誰にも相談できないお母さんの切羽詰まった姿がそこにはあったのです。

東村山の「ころころの森」では、開設当初より、「ひまわりの会」という子どもの健康相談を2か月に1回開いています。これは、子どもの成長、発達の中で、病気とは言えないながらも思い悩んで、子育てしている保護者に向き合おうということが出発点でした。同時に、小児科外来や保健所の相談事業、発達相

談とは重ならず、「ころころの森」独自のスタイルで、子どもと一緒に遊びに来たそのついでに、気軽に子どもの健康相談ができるような場を作ろうと考えました。子どもが遊んでいるその横で、時には白梅の学生が子どもたちの相手をしながら、お母さんたちは、時間や子どもたちのご機嫌を気にせず、ゆっくり相談できるようにしました。そうすると、初めは「子どもの体重が最近増えていない」という相談から、離乳食の進め方、お昼寝の取らせ方、1日の時間配分の仕方、子どものしつけの方法などどんどん話が発展していきます。子どもの体の相談というよりは、実は子育てに悩んで過ごしている親の姿が垣間見えてくるのです。



そこで、1か月に1回、体重、身長を身体計測する「つくしんほの会」でも子どもの健康相談を行うことにしました。ここでは、計測の後に、保育士さんが子育て相談をして、その中から健康相談がある方との話



をすることにしましたのです。この毎月行う身体計測はとも好評で、いつも大にぎわいです。特に相談事がないうというお母さんともお話しすると、はいはいの仕方から卒乳の仕方、予防接種の受け方など話題はつきません。

子育て中のお母さんが、精神的にも追い込まれた気持ちになりがちなのは、頭の中で考えたことが、なかなか思うようにいかないときです。特に、学生時代、あるいは仕事をしていたときに、きちんとうまくやっていた人ほど、苦しくなるようです。例えば、育児ノートにぎつしり授乳時間、オムツ替え時間、睡眠時間を記録しているお母さんは要注意です。子どもがなぜこちらの思い通りに飲んでくれないのか、寝てくれないのか、という悩みにはまっていきます。かと言う私も、初めての育児では同じような誤りに陥りました。20数年前でしたので、当時は母乳信仰まっさかりで、自分の子どもがどうし

ても母乳をいやがって哺乳瓶を飲もうすると、母親失格なのではと落ち込み、体重を毎日量りながら、一喜一憂していました。赤ん坊が欲しがるときに母乳をあげなさいという「自律哺乳」は、確かに授乳回数を増やすことで、母乳の出方を良くする効果もあるのですが、そのことに必死になる余り、自分の休憩もとらずに頑張っていると、かえって出てこなくなることもあります。「自律」というのは、赤ちゃんの「自律」だけではなく、お母さんの体調も考える「自律」も含まなければなりません。母乳は努力で何とかしようではなく、のんびり構えていれば、子どもが欲しがるときに、自然に張ってくるものだと気が付いたのは、随分経ってからでした。

「ころころの森」の相談では、卒乳の悩みも結構ありました。以前は、1歳で哺乳をやめる「断乳」という指導でしたが、最近は、食事が食べているのなら、無理してやめるのではなく、自然に離れるのを待つという「卒乳」が主流になりつつあります。ただ、母乳の場合、子どもがぐずるとすぐに母乳をあげて、取りあえずおとなしくさせてしまうという習慣から抜け出せなくなると、このことが悩みになっています。2歳過ぎまで授乳させていても、子どもの精神発達には問題ないということになっていますので、時期の問題はそれほど気にする必要はないのですが、子どもがぐ

ずったときに母乳をあげることができるのは母親しか
いません。ということは、子どもとの関係に母親の比
重がかなり大きくなっているということなのです。実
際、保育園児にはこの問題はほとんど生じません。家
庭で一人24時間、子どもと付き合っているお母さん達
の精神的負担は相当なものとも思われます。

食べることと同じくらい悩みの種になるのが、眠り
の問題です。お母さん一人で子育てしている場合、昼
寝の時間が一定にならない、夜がなかなか寝つけない
といった悩みが多くなります。子どもが寝たときに、
唯一の自分の時間という場合は、寝かしつけたと思っ
てもすぐに起き出されてなかなか自分の時間が持てな
いという悩みになります。これは、1日の生活スケ
ジュールにも大きな影響が出てきます。こんなときも
保育園児は、生活リズムを作りやすいのですが、お母
さんが一人で切り盛りしなければならいとなるとな
かなか思い通りにいかなくなります。夜も寝かしつけ
ようとあせるあまり、授乳を多くして、かえって夜間
起きるパターンから抜け出せなくなったり、そこから
昼間の離乳食がうまくいかなくなったりと悪循環には
まり出すと、お母さんの体の疲れも相乗効果になっ
て、精神的に落ち込むことになります。

子どものしつけの悩みもいくつかありました。子ども
もが落ち着きがなくてなかなか言うことを聞いてくれ

ないと思える度に、「発達障害では」と思ってしまった
り、逆に素直に親のそばにいてくれると、友達とう
まくいかないのではと心配してしまったりします。子
育ての講演に熱心に参加されているお母さんからは、
自分のしつけの仕方が間違っているのかしらと不安に
なつての相談もありました。ここから窺えるのは、子
育てに自信を持ってないお母さん達の姿です。一生懸命
やっているのに、うまくいかない、あるいはうまく
いっていないと思われているのではないかと不安に
なっているお母さん達です。

思わず、「お母さんよくがんばっているね」と声を
かけるのですが、そのときに、久しぶりにその言葉が
聞けたというように、はっとした顔を見せてくれる方
が多いのがとても印象的でした。子育て中の、特に仕
事を持たずに育児に専念しているお母さん達は、自分
の今を社会から評価されずに毎日を送っていると思
っているのではないのでしょうか？ 以前、子育て
が楽しいかどうかを保護者に尋ねる世界的なアンケー
ト調査がありました。日本のお母さんが世界で一番
楽しくないと答えていたという結果に、このことはつ
ながるのかもしれない。

子どもの健康相談の中には、海外より帰国したばか
り、地域の医療、福祉サービスの受け方がわからな
いというご相談もありました。特に、予防接種の受け

方がどうして良いかわからないのです。

少子化支援において、日本福祉体制の不十分さがしばしば指摘されていますが、医療費助成や健診などの保健指導は、不十分ながら、制度として存在しています。問題なのは、どれも自分で該当機関に出向いて申請したりしなければならぬ点です。乳幼児医療公費負担を受けるにも、平日の日に役所に行かなければなりません。市外で医療を受けたときには、一度支払ってその領収書を持って再び出向かなければなりません。慢性疾患の医療費支援については、その制度について知らなければ、恩恵すらも受けられません。海外から帰国した親子がとまどうのは、まずそうした制度がどこに行つて、どうすれば良いのか、説明してくれる人に出会うまでわからないということなのです。また、いろいろ出向くにしても小さな子どもに配慮されている役所がどれくらいあるでしょうか。例えば子どもの遊び場、オムツ換え用ベッド、ベビーカー置き場、授乳室がどれくらい整備されているか、まして途中の道路が子連れの親子にどれくらい安全性が配慮されているかなど、考え出したら、出かけるのすら億劫になる親子もいるでしょう。わざわざ面倒にして、なるべく申請を少なくしようとしているとは思いたくありませんが、住民票の登録をしたら、子どものいる家庭には自動的に案内書が届くくらいの配慮があつて良

いような気もします。

予防接種のお知らせも意外と手薄です。地域の広報に記載はしてあるのですが、そこを見なさいとは誰も教えてくれません。しかも、日本の場合、接種時期が決まっているので、それをはずしてしまうと有料になるという事実はなかなかわかりづらくなっています。かかりつけの小児科に行けば、そこで教えてくれますが、どこをかりつけにすれば良いかは、地域の情報が手に入らないときには、なかなか決めかねていたりします。

こうした子育てに悩み深き母親がどうして多いのかということに対して、しばしば「核家族化」で「少子化」の時代で、情報が少ない中で、母親がひとり子育てをしなければならぬからだと説明されてきました。しかし、インターネット、テレビ、雑誌など様々な情報が氾濫する中で、子育ての情報も例外ではなく、その情報がお母さんたちに届いていないわけはありません。むしろ、情報に対して、真摯に受け止めて、それに答えようと努力する母親のほうが、うまくいかずに悩んでしまっているように見えます。昔はおおらかに子育てできて良かったという人もいます。しかし、思い起こしてみれば、生活の糧を支えることに必死だった時代に、子どもの一挙一動に振り回されるゆとりもなく、また、子どもたちの感染症での死亡率

が高かったことを思えば、おおらかに子育てしなれば、身も心も持たなかったのではと思えます。現代の日本は、乳児死亡率は世界でもトップクラスに低く、そのことが、子どもは健康に育つものという共通認識を生み出して、そこからちよつとでもはずれそうになることへの大きな不安があるようです。

また、男女の役割分担を前提とした、家庭のこと、子育てのことを女性に任せるという家族観が日本の戦後の高度成長を支えた原動力になっていたことも影響しているようにも思われます。学業や仕事はある程度努力すればうまく成果をあげることができるとも思いません。しかし、子育てもその仕事の延長線で、がんばればうまくいくとも限りません。子育て関連の本をたくさん読んだから子育て上手になるというわけではないのです。子育てを誰かの責任として任せるのではなく、様々な目と価値観の中で育むものとしてとらえ、少しでもお母さんの肩の荷をおろすことができるたら、親子共々随分と楽になって、子育ての奥の深さを共有できるのではないのでしょうか。

そうした意味においても「ころころの森」の試みは、意義深いものがあります。最近、保育所、幼稚園では子育て中の保護者の相談を受ける役割を地域で行うようになってきていますが、保育所に行っていない、幼稚園に行く前の子どもの受け皿がほとんどな

かった中で、2歳児以下の子どもがいる親子を中心とした「ころころの森」の存在は画期的です。東村山だけでなく、近隣の市町村からも訪れるのも納得がいきます。今まで「公園デビュー」くらいしか社会体験できる場がなかった親子に新たな選択肢を示しています。親同士の間がりがなくても参加できるし、気軽にスタッフの方に相談できる利点があります。また、「ころころの森」では、お父さんの姿もしばしば見られます。まだまだ少数派なので、子育ての悩みまでは見えてこないのですが、新しい子育ての形も見えてきます。学生達の参加も大きな魅力です。子どもたちは、親とは違った学生達に、自然に近寄っていくことで新たな人間関係を作り出しているようです。



学生達がお母さん達の相談を横で聞きながら、頷いているだけでもお互いが子育ての悩みを共有できたりします。子育て相談とは、誰かが誰かに解決してもらおうものではなく、共有しながら、一体感を作り出せたときに、また新たな道が見えてくるのかもしれない。